

研究ノート

スポーツ選手をとりあげた「特別の教科 道徳」の授業に関する一考察 田中卓也¹⁾

A study of class in moral education take for sportsmanship(sportmans spirits),sporting activities of many atheletes in Japan
TANAKA Takuya

概要

本研究は、小学校（2017年から）および中学校（2018年から）にて実施されることになった「特別の教科 道徳」の授業をとりあげ、スポーツ選手に焦点をあて、道徳の授業がどのように展開されるべきか、について考察および検討を試みるものである。中学校・高等学校の免許取得に励む学生に模擬授業を実施させると、多くの学生がスポーツ選手をとりあげた道徳の教材として模擬授業を試みた。さまざまなスポーツに関心を持ち、自分の考える授業を展開することこそが、学生らの本意であった。アクティブラーニングの導入や「考え、議論する」道徳の授業にイメージがわからない学生も多く、授業研究の時間の増大や授業の本質論についても検討しなければならないといった、新たな課題もうまれてきている。

Abstract

The consideration of this study is to clarify the practical teaching of one for morality subject-ization in their class and take for sportsmanship(sportmans spirits),sporting activities of many atheletes in Japan.The ministry of education,culture,sports,science and technology puts morality subject-ization into effect. Now they are trying to strengthen” the whole scholastic campaign “based on the overall unit-like morality class culliculum that has put into effect.

Therefore,more the reseach that examine the effects of moral institution and evaluation in a concrete mannar with a focus on behavior are needed in the future.

Keywords : moral education, sportmans ship, junior high school students, contents of moral education

I. はじめに—本研究の目的と先行研究の検討—

本研究は、小学校（2017年から）および中学校（2018年から）実施されることになった「特別の教科 道徳」の授業をとりあげ、「スポーツ選手」に焦点をあて、道徳の授業がどのように展開されるべきか、について考察および検討を試みるものである。ところで、執筆者は所属先の大学において、「道徳教育」の講義を担当している。前期・後期通じて木

曜日の第1時限に行っている。受講者は中学校・高等学校の「社会科」、「保健体育」の教員免許取得に励む学生が対象であり、講義内の12回から14回(の3回)の講義において「授業の計画立案」および「模擬授業」を実施させている。模擬授業の題材を事前に受講学生に選考させると、多くの学生がスポーツ選手をとりあげることが多い。学生各自が選択したスポーツ選手を題材とした、授業を試みさせた。さまざまなスポーツに関心を持ち、自

1) 静岡産業大学経営学部
〒438-0043静岡県磐田市大原1572-1

1) School of Management, Shizuoka Sangyo University
1572-1 Owara, Iwata, Shizuoka, 438-0043, Japan.

分の考える授業を展開することこそが、学生らの本意であった。アクティブラーニングの導入や「考え、議論する」道徳の授業にイメージがわからない学生も少なくなく、授業研究の時間の増大や授業の本質論についても検討しなければならないといった、新たな課題も生まれてきている。

Ⅱ. 道徳教育の歴史と変遷

1. 明治期から昭和戦前期における道徳教育の展開

道徳教育が登場するようになったのは、1872（明治5）年に、日本の近代教育制度の嚆矢とされる「学制」が公布されたことによる。学制の公布により、すべての子どもたちに普通教育が実施された。この背景には西欧列強諸国による東アジアの植民地化計画があり、日本もその例外でなかったことがある。学制では、「修身」が新設されたことから、日本の近代学校制度における道徳教育は、修身という教科で開始されたといえる。

さて修身は、1872年に文部省が発刊した「小学教則」によると、「修身口授（ギョウギノサトシ）」として登場した。しかしながら辻野修身の授業は、教科書をただひたすら読み上げるのみに執着し、教師が文意を説明することを中心に行われていたのだという。当時の修身教科書には福沢諭吉の著した『童蒙教草』などがよく使用された。同書は、イギリス人チャンブルのまとめた教訓的な逸話集を訳したものであった。その他の修身教科書も、欧米の倫理書を翻訳したものが多い。これらはおもに欧米人の生活道徳であった。明治初年時の修身は、欧米の道徳的逸話を知識として教え込み、欧米由来の生活道徳を育てようとしたものであった。日本は、緊迫した国際社会において独立を保つため、早急に西欧文明を受容し、近代化を進めなくてはならなかった。その際には国民の道徳の近代化について必要となった。

1880（明治13）年には「改正教育令」が公布されることになり、「修身」はさまざまな教科のなかでも最上位に置かれた。修身の最上位に伴う教科化は、当時の西洋偏重や伝統

軽視の風潮さらには自由民権運動に見られる明治政府への反体制的思想や行動を学校教育の改革によって打開しようとした儒学者の要求が反映したものであった。

修身教科書の教材構成にも見るができる。同年、文部省が刊行した『小学修身訓』は、『中庸』・『論語』・『孟子』などの儒学の古典からの引用をはじめ『大和俗訓』などの国学の古典からの引用やさらには中村正直の著した『西国立志編』などの西欧倫理書の翻訳引用で構成されていた。教育令の時期の修身科については、儒学的な内容だけでなく、国学や西欧近代思想の内容が入り交じった折衷的な教材として用い授業を施していた。

1890（明治23）年に、明治天皇の御言葉（詔勅）として「教育ニ関スル勅語」（いわゆる教育勅語）が頒布されることになった。教育勅語は以後60年近くにわたり、第二次世界大戦終戦に至る時期まで、徐々に日本の教育の根本目的として位置付けられていった。

2. 第二次世界大戦後以降における道徳教育の動向

1945（昭和20）年8月15日の第二次世界大戦における日本の敗戦に伴い、教育界も大きな変革を求められるようになった。「教育勅語」は「教育基本法」の制定に伴い、失効した。このことは日本の新たな学制改革が進行していくことになった。

文部省は「新日本建設ノ教育方針」を策定し、世界平和と人類の福祉に貢献すべき新日本建設のため、戦争遂行の要請に基づく教育施策を一掃し、文化国家、道義国家建設の根本となるような、文教施策を実行することに努めるといった方針を示した。戦時中に使用された教科書については「墨ぬり教科書」として再利用し、国家思想や軍国思想に関する記述について、墨で黒く塗り使用した。

連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）は当時日本を統治していたこともあり、同年10月に「日本教育制度ニ対スル管理政策」を公布し、教育についての占領政策の方針を明らかにした。相次いで「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘

布ノ廃止二関スル件」、「就寝、日本歴史及び地理停止二関スル件」を示し、近代教育の確立し、以降継続されてきた政治や教育の大きな柱とされてきた国家神道が国家から切り離され、他の宗教と同じ位置に戻された。また、学校児童や生徒らの「心の拠り所」とされた修身の授業の停止、それに伴い日本史、地理の授業の停止通達されることになった。

教育に関する方針が次々と示されることで、戦前期までの教育を推進してきた思想をはじめ、教師の追放や教科書の廃止にいたるまで次々と進められた。それは国家主義から民主主義への転換を意味するものとなった。

1947（昭和22）年になると、アメリカの教育学者らにより、日本側の教師らに「コース・オブ・スタディ」（教師の手引書）の訳語として「学習指導要領」がもたらされることになった。この時の「学習指導要領」は「試案」（サンプル）という扱いであり、今後の授業における参考指針としての意味合いであった。同年の学習指導要領において、それまで停止となっていた修身・日本史、地理は「新社会科」という新たな教科として復活を果たした。そこでは「今日のわが国民の生活から見て、社会生活についての良識と性格とを養う」ために、「これまでの修身・公民・地理・歴史などの教科の内容を融合」したものであった。しかしながら「修身」についてはいまだ単独教科としての復活は果たせずにいた。

1950（昭和25）年になると、第二次米国教育使節団が来日し、同年9月に提出された報告書には「道徳および精神教育」についてふれられていた。「道徳教育は全教育課程を通して、力説されなければならない」ものとして記されていた。道徳教育は学校全体で行う教育であることが位置付けられた。

この流れを受け、同年12月に時の文部大臣であった天野貞祐による教育課程審議会への同党教育振興についての諮問がなされ、道徳教育は学校全体で責任をもって行うこと、道徳の時間は特設しない、文部省が道徳教育の手引書を新たに作成するなどを要望したとされる。

天野は個人的にも『国民実践要領』といわ

れる国民を対象とした戦後の新しい道徳のあり方について示している。それは個人、家、社会、国家に関する徳目を列挙したものであった。以降3年間にわたり、道徳教育は学校の教育には必要なものと審議されていく機会が増加し、「道徳の時間」の特設が再び俎上に挙げられるようになった。

1958（昭和33）年になると、再び道徳教育のあり方についての諮問がなされ、教育課程審議会において「道徳の時間」の特設、「道徳教育の基本方針」が発表された。そこでは「特設道徳の趣旨」をはじめ、目標や指導内容、指導方法、指導計画の作成に至るまで大綱化された。

かくして同年4月に小学校、中学校の教育課程のなかに「特設 道徳の時間」が配置されることになった。それを受けて授業開始となり、以後約60年にわたり曲がりなりにも実施されてきた。

「特設 道徳の時間」は、学級担任がこれを行うものとされ、児童生徒に対し、望ましい道徳的習慣・心情・判断力を養い、社会における個人のあり方についての自覚を主体的に深めながら、道徳的实践力の向上を図るものであった。小学校では1年次では年間34時間、2年位以上は年間35時間を要し、中学校はすべての学年において年間35時間以上実施することと決められた。週1時間の配当ということになる。

また「特設 道徳の時間」は、小学校、中学校で授業は行われるものとされたが、「教科」としての位置づけではなかった。すなわち教科、特別教育活動、学校行事と並ぶ領域として正式に教育課程の中に配置された。

道徳の授業では、教科書が特に指定されなかった。『学習指導要領』の内容に基づいた目標や内容について示されているだけであり、授業内容は教師に委ねられていた。

評価については、国語、算数（数学）のような一般の教科と同様の評価を下さず、異なる評価を行うことが要請された。道徳の表が態度や行動についてなされる場合には、「行動の記録」と一体として評価すべきとされていた。「日本教職員組合」（日教組）による、

反対声明やストライキによる授業放棄などの反対運動が繰り広げられたこともあったが、教師は先の道がみえず、手探りの状況のなか迷いながらも、さまざまな授業を展開したり、指導理論を構築していくことになった。

1960年以降になると、道德教育は「生活主義的な道德の授業」に変化していった。道德教育は学級会の活動の特徴を明らかにすることに関心が寄せられた。それはかつて行われていた修身の徳目中心主義の道德教育への批判を皮切りに、子どもに教えるべき徳目を、子どもの実際の生活にねざしたものを取り上げようとしたことが起因していた。これ以降道德教育は文部省が作成した「指導資料」を用いた授業を行うスタイルが確立し、全国の小学校や中学校で無償配布されることになった。「道德の時間」では、いつしか「読み物資料」を使用した授業が定着していくことになった。

Ⅲ. 道德の教科化への動き

2013(平成25)年2月に「教育再生実行会議」の「いじめ問題等への対応について」において、心と体の調和のとれた人間の育成に取り組む観点から、道德の時間を教科化することが提言された。2014(平成26)年2月に中央教育審議会に「道德に係る教育課程の改善等について」諮問し、専門的な検討を経て、道德の時間を「特別の教科」(仮称)として位置付けることなどを提言する「道德に係る教育課程の改善等について」(答申)が同年10月21日に文部科学大臣に提出された。

学校における道德教育は、道德科を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切に行われなければならない。道德教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道德性を養うことを目標とする。道德教育を進めるに当たっては、次の点に特に留意しなければ

ならない。

- (1) 人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かす。
- (2) 豊かな心をもつ。
- (3) 伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図る。
- (4) 平和で民主的な国家及び社会の形成者として、公共の精神を尊び、社会及び国家の発展に努める。
- (5) 他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献する。
- (6) 未来を拓く主体性のある日本人を育成する。

道德教育を進めるに当たって配慮すべき事項は、次の通りである。

- (1) 各学校においては、道德教育の目標を踏まえ、道德教育の全体計画を作成し、校長の方針の下に、道德教育の推進を主に担当する教師である道德教育推進教師を中心に、全教師が協力して道德教育を展開する。
- (2) 各学校においては、児童生徒の発達の段階や特性等を踏まえ、指導内容の重点化を図る。
- (3) 学校や学級内の人間関係や環境を整えるとともに、集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動、地域の行事への参加などの豊かな体験を充実する。
- (4) 家庭や地域社会との共通理解を深め、相互の連携を図る。

道德科の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道德性を養うため、道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことにある。とりわけ道德科の特徴は、学校の教育活動全体を通じて行う道德教育の要として、道德的諸価値の理解に基盤を置き、いかに生きるかという人生における重要な問題についての考えを深め、自己の主体的な生き方を形成することにあると考えられる。道德科

の内容については、児童生徒が人間として他者とよりよく生きていく上で学ぶことが必要と考えられる道徳的価値を含む内容が、短い平易な文章で表現されている。

これらの内容項目は、児童生徒が道徳性を養うための手がかりとなるものとされている。道徳教育の目標を達成すべき内容項目は、「A主として自分自身に関すること」「B主として人との関わりに関すること」「C主として集団や社会との関わりに関すること」「D主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」という4つの視点から、小学校では「第1学年及び第2学年」、「第3学年及び第4学年」「第5学年及び第6学年」の各学年段階に分けて示されている。4つの視点は、相互に深い関連性を持っている。したがって、中学校は22項目にまとめられている。

IV. スポーツ選手と道徳

1. 本学学生における「道徳でとりあげたいスポーツ選手」

執筆者は、2018（平成30）年4月より「道徳教育」の授業を開始することになった。受講学生の多くは中学校・高等学校の保健体育の教員免許状取得をめざす学生であるため、まずは実際使用されている中学校の道徳の教科書について彼らに見せながら、内容についての説明を行った。その際に彼らに対し、「教科書のどの章であれば授業をしたいのか」という質問を投げかけたところ、8割の学生は「スポーツ選手」の掲載されている章であると回答した。

彼らに見せた教科書は、執筆者が所有していた学研出版が刊行している『中学生の道徳 明日への扉』（中学校1学年～3学年平成30年度）である。『明日への扉』について目次を見てみると、第1学年用のものでは、「真の国際人 嘉納治五郎」（66～70ページ）、「イチローの軌跡」（138～140ページ）、第2学年用のものでは、「鳥のように飛びたい 高梨沙羅」（10～13ページ）、「父との約束 松井秀喜」（73～74ページ）、「声援を力に 第72代横綱稀勢の里」（178～180ページ）、第3学年用のものでは「スポーツの力 佐藤真

海」（160～164ページ）、「杉原千畝の選択」（170～174ページ）がとりあげられている。学研の道徳教育テキストには、各学年ごとにスポーツ選手ならび日本のスポーツに貢献した人物が取り上げられていることがうかがえるよう。

学生に聞いてみると、「高梨沙羅」、「松井秀喜」、「イチロー」の3名を希望した者がほとんどであった。3名に共通して選んだ理由には「小さい頃の憧れのスターであったから」、「テレビでよく見かけたから」、「メジャーリーガー、世界で活躍するアスリートになって活躍すると感じていたから」、「高校時代の甲子園での活躍のときから大物を予感させていたから」、「スキージャンプで数々の史上最年少の記録を塗り替えていったから」などさまざまであった。

多くの受講生らはスポーツに関心があり有名な選手になればなるほど、憧れのまなざしで見ようになり、やがて自分も彼らのようになりたい、近づきたいと思う存在になっていくことが大きな理由であったように感じている。

2. 「スポーツ選手」をとりあげた道徳授業の構想

同じ講義時間内に彼らには、道徳の授業をすることを想定した授業の構想について考えてもらった。学生らは道徳の講義を受けて間もないこともあり、指導案の書き方の学習はこれからである。そのため、A4用紙1枚程度で中学校50分の授業のおよその構想を考えさせながら案を作成させた。その後講義終了後に回収した。

多くの学生の記述をみると、まずは授業の最初5分から10分については、「スポーツ選手の人物像（どんな人物であるのか）」について、生徒に発言させる」という記述が多く見られた。つぎに「生徒自身がそのスポーツ選手のどこを尊敬しているのか（素晴らしいと思うのか）」について、5、6人を1つのグループとして、議論させる」というものであった。さらに「互いに意見を出し合いながら、各グループごとで意見をまとめ、授業の最後の時

間（授業終了 20 分前から 5 分前まで）までに発表させる」という内容をイメージしていた受講生がほとんどであった。

またなかには、グループでの議論はせずに、スポーツ選手のテキスト掲載箇所について読ませて授業を終わるという者も存在していたことを確認している。

受講生らには、講義内で少しずつ「アクティブラーニング」が採用されている影響もあったのか、生徒同士の話し合いを重視した授業を構想した者もいれば、先生が授業を進め、学生は先生の授業を聞くという、古いスタイルの授業を構想した者もいたことから、道徳の授業の在り方が学生によってさまざまであることを認めることができるのではないか。また「アクティブラーニング＝生徒同士の話し合い」という等式が成立するような短絡的な授業を構想していることがうかがえよう。

さらに受講生に対し、「道徳の授業を受けた印象があるのか」と聞いてみると、ほとんどの学生は「なんとなく、道徳の授業があった気がする」とあるとか「道徳の授業はあったが、本を読んで終わりであった」、「ほかの補習授業に変えられた」など、道徳の授業のイメージも受講生たちには、インパクトが強いものではないことがうなづけよう。

V. おわりに—スポーツ選手から学ぶ道徳の意義—

道徳教育の歴史を整理し、教科化を目前にした今日における現代的な課題とともに、道徳教育の立ち位置を浮かび上がらせてきた。つぎに、新学習指導要領の方向性を改めて整理しながら、道徳科のあり方と、全面主義としてこれまで学校全体で実施されてきた道徳教育のあり方との関係性を描出し、また学習指導要領解説に沿ってその問題点のありかたを考察した。さらに「考える道徳」・「議論する道徳」の視点から、情報モラルと道徳教育との接点を探り、情報モラル教育の問題点を指摘した。具体的には、現在の情報モラル教育が学校現場において「教えるもの」として成立していることに着目し、本来的には情報モラルは子どもたちが判断を求められる状況

で適切な行動がとれるように指導することが重要であることを指摘した。加えて、このことを改善する手段として、道徳教育において情報モラルを広く扱う可能性を提案し、今後の道徳の教科化へ向けての展望を示した。

以上のことから教科としての道徳科を含む道徳教育が現代的課題に対してどのようにあるべきかについて一定の示唆を得ることができた。またその中で、情報モラル教育を扱うことへの可能性も指摘された。一方で、本研究で得られた成果を基に道徳教育における実践へとつなげ、実践的な効果と問題点をそれぞれより具体的に明らかにしていく必要があるが、これは、今後の課題である。今後はこの点について、実証的に研究を行っていく予定である。

引用文献・参考文献

- 1) 豊泉清浩「道徳教育の歴史的考察（1）—修身科の成立から国定教科書の時代へ—」（文教大学教育学部『教育学部紀要』第 49 巻、2015 年、27～30 ページ）。
- 2) 豊泉清浩「道徳教育の歴史的考察（2）—『道徳の時間』の特設から『特別の教科道徳』の成立へ—」（文教大学教育学部『教育学部紀要』第 50 巻、2016 年、243～252 ページ）。
- 3) 文部科学省『中学校学習指導要領』（2017 年 3 月）。
- 4) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』（2017 年 3 月）。
- 5) 『中学生の道徳 明日への扉』（中学校 1 学年～3 学年、平成 30 年度）学研。
- 6) 『文部科学省私たちの道徳 中学校』廣済堂あかつき株式会社、2014 年。
- 7) 一般社団法人静岡県出版文化会編『静岡県中学校道徳副教本 中学心ゆたかに 2 年』静岡教育出版社、発行年不詳。
- 8) 海後宗臣・仲新・寺崎昌男『教科書でみる現代日本の教育』東京書籍、1999 年。
- 9) 貝塚茂樹『戦後教育改革と道徳教育問題』日本図書センター、2001 年。
- 10) 酒井郷平・田中奈津子・中村美智太郎「道徳教育の史的変遷と現代的課題—道徳科に

おける情報モラル教育の可能性―」（『静岡大学教育学部研究報告』（人文・社会・自然科学篇）第 67 号、2017 年、105～110 ページ）。

- 1 1) 勝部真長・渋川久子『道徳教育の歴史 修身科から「道徳」へ』玉川大学出版部、1984 年。
- 1 2) 柳沼良太『「生きる力」を育む道徳教育―デューイ教育思想の継承と発展』慶應義塾大学出版、2012 年。
- 1 3) 柳沼良太『「特別の教科 道徳」をどう位置づけするか』（押谷正夫・柳沼良太編『道徳の時代をつくる！―道徳教科化への始動』教育出版、2014 年）。
- 1 4) 吉田武男『「心の教育」からの脱却と道徳教育―「心」から「絆」へ、そして「魂」へ』学文社、2012 年。
- 1 5) 白石崇人「日本の学校における道徳教育の展開―修身教育、教育活動全体、道徳の時間、特別の教科―」（『広島文教女子大学紀要』第 51 巻、2016 年、48～50 ページ）。
- 1 6) 戸江茂博監修、田中卓也・松村齋・時田詠子編『基礎からわかる教育課程論』（大学図書出版、2019 年、26～28 ページ）。
- 1 7) 小林万里子『「道徳の時間」成立期における教育的関係の論議』（岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第 168 号、2018 年）。
- 1 8) 小林万里子『「道徳の時間」の授業論にみる教師の指導性』（岡山大学大学院教育学研究科研究集録』（第 171 号、2019 年、16～17 ページ）。
- 1 9) 押谷由夫『“道徳の時間” 成立過程に関する研究―道徳教育の新たな展開―』東洋館出版社、2001 年。
- 2 0) 江島健一『日本の道徳の歴史―近代から現代まで―』ミネルヴァ書房、2016 年。
- 2 1) 小林福太郎編『特別の教科 道徳』（大学図書出版、2020 年 2 月刊行予定）。

